

田所金久 投稿集



I 憲法を学び、大軍拡を阻止する

～9条は例外ではない～

II 戦後民主主義を「誠実に希求」した大江健三郎

III 読書という旅に出る



I 憲法を学び、大軍拡を阻止する

～9条は例外ではない～

(1) 日本国憲法前文と9条

過小評価されているが、パリ不戦条約(1929)成立以後、戦争は否定されてきた。以前は領土を武力で奪うことも人の命を奪うことも罪にはならなかった。1年あたり1.21件征服戦争がおこったが、不戦条約成立以後は千年に1度か2度に激減している。第2次大戦後、国連が成立後に、国連憲章で戦争は禁止され戦争が禁止されているのが普通の国である。戦争は国際法と国内法で2重に禁止している。(日本 憲法9条、ドイツ 基本法26条 イタリア 憲法11条)日本が特別な国ではない。

日本国憲法前文と9条

前文 平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めている国際社会において、名誉ある地位を占めたいと……

9条は人類のあるべき理想を示す先進性ととも、国民の生活と財産を守る現実的な力であった。

(2) 平和憲法はアメリカの押しつけではない

平和外交で有名な幣原喜重郎(総理)がマッカーサーに軍隊の放棄を提案した時、軍人である彼は驚いたが、やがて同意した。このことは今ではマッカーサーノートや幣原の秘書だった人物が、幣原の死の直前に聞いた事実からも明らかである。ただ冷戦の激化から、占領軍は方針を変え日本に軍備を迫った。しかし吉田茂総理はこれを拒否した。吉田学校の優等生と言われた池田総理も軍事小国・経済大国の道を選んだ。しかしアメリカの要求、岸信介などの公職追放の解除などの情勢から、警察予備隊→保安隊→自衛隊と名前を変えつつ、戦争のできない弱いものなので憲法違反ではない→専守防衛と理由を変えつつ今日に至った。

(3) 戦争は準備され、ナショナリズムがおこす

戦争は準備され、おこる。私たちは平和を守る準備をしなければならない。これは加藤周一の言葉である。「だまされた」というだけではまただまされると大江健三郎の妻の兄、映画監督の伊丹は戦後すぐ言った。

(4) 安保3文書を読み解く

「新しい戦前になる」これはテレビ番組(2022.12.18 徹子の部屋)で「来年はどんな年に」と質問した黒柳に対するタモリ氏の答えである。80年近く続いた戦後が終わり、戦争が起こるかもしれないというのである。言うまでもなく、岸田総理の安全保障関連文書の見直し発言・閣議決定(12.16)を受けての発言である。この国会にもかけない悪質な決定は、国民生活の三つの破壊をもたらす。これとともに二つの日米共同声明が出され、今回の「安保三文書」改定が中国を敵国とする対中国軍事同盟であることが示された。それは ①暮らしの破壊 ② 平和の破壊 ③ 平和憲法の破壊 をもたらすものであるが、以下、少し解説してみたい。

(5) 日本は既に戦時体制(安倍首相の悲願)

日本を軍事大国としようとする安倍氏は、「戦争四法」というべき特定秘密保護法、安全保障関連法、共謀罪法、重要土地利用規制法(菅内閣)を制定してきた。そして今 ①防衛費 GDP 2%(22年度の倍 11兆円) これはアメリカの兵器爆買のつけによる。軍事産業は肥え太り、政治を支配する。②敵基地攻撃能力保有・・・国連憲章違反の先制攻撃につながり、本格的な戦争となり、原発、石油タンクの多い日本は火の海となる。全世界の陸地面積の 0,3%に過ぎない日本に全世界の約 10%の原発が存在する。戦争となればこれが日本に対する核兵器となる。憲法9条を守れという人を現実を見ていないというが、原発は攻撃されない・武力で国民の生命と財産を守れるという主張こそ、現実を見ないのである。地形学的に見て細長い日本と違い、広い大陸である中国は先制攻撃を受けても滅ばない。

(6) 軍隊は国民の生命・財産を守らない

ロシアのウクライナ侵略がおこり、日本も軍事力を強化すべきだと思っている人が増加している。しかし、世界に約 200 の国がある中で、日本は軍事費で 5 本の指に入る軍事大国であることに気が付いていない。国を守るために軍事力を充実させる必要があるというが、「敵基地攻撃能力」の保持は日本を戦争に巻き込む「新しい戦前」をもたらしても、国民の命を守らない。

北朝鮮の核保有、中国の軍事力の強化を口実に、ナショナリズムをあおり、国民の統合を図り、アメリカ追従の戦時体制の確立を進めている。ありえないことだが……

(7) 外国に侵略されたらどうする

これについては、欧米でも二つの説・立場がある。

ひとつは現在のウクライナのように武力で立ち向かうべきだという、ナショナリズム派の立場である。この立場は悲惨さを伴うことがある。日本が侵略国であったが、県民の 4 人に一人が命を失った沖縄の例によりがある。もし降伏しなかったら米軍により、土佐湾や東日本の沿岸には鉄の雨が降りそいだろう。国土を戦場にするという状況下で、国民の命を守り切ることは不可能である。もう一つは、たとえ侵略されても、武力による抵抗ではなく命を守るべきだという立場がある。欧米諸国は今回のロシアの侵略に対し、武力での抵抗は止めるように勧告していた。



悲惨な戦争体験を持つ沖縄は「生命(ぬち)どう宝」という言葉を生み出した。ガンジー・ネルーのインドは「無抵抗の抵抗」をつらぬき、イギリス帝国主義の支配を打倒した。ソ連などの侵略に対し国民は非暴力で対応し、やがて主権を回復し、その行為が美しいのでチェコは「ビロード革命」と呼ばれている。私はガンジーの墓地やチェコの記念碑の前に立ち感慨深いものがあつた。いま新聞「アカハタ」に連載されている「立春大吉」にイギリスの大知識人の「戦争をやめる近道は降伏することである」という言葉を紹介している。私たちは戦争を回避する日本としての国家像を考えるべきである。この場合日本国憲法前文と 9 条に基づく平和外交が必然となってくる。

(8) 身捨つるほどの祖国はありや

マッチ擦るつかのまの海に霧ふかし 身捨つるほどの祖国はありや (1957 寺山修司)

朝日新聞は社説(2.26)で「平和だけでなく、『正義』を」を掲載した。ウクライナへのロシアの蛮行を思うと、共鳴する人が大多数だろう。しかし一人のひとの命の重さは地球の重さより重い」という言葉を押しよける正義はあるだろうか。

国民国家論の出現以来、「民族」の一員でこれを守ることが正義だと言われている。しかし人間の集団は、遺伝子学の発展で、混ざり合い交流して存在してきたことが明らかになっている。「純粋な民族」に生物学的基礎はない。民族という集団の形成は、人類史の尺度から考えるとそれほど古いものではなく、いちばん長い歴史を持つものでも数千年で、ホモ・サピエンスがアフリカを旅立って6万年立っているから、民族はその1割に過ぎない。「民族を守れ」という思想は戦争中に国民を統合するために使われてきた。私たちは「生命(ぬち)どう宝」を最大の正義としたい。

(9) 安保三文書の全体像

従来「防衛三文書」と呼ばれてきたもので、①総論的な「国家安全保障戦略については中国を「想定敵国」とし、軍事費を GDP3%の大枠の説明 ②「国家防衛戦略については「反撃能力の保有」「南西地域の防衛」など防衛方向の概要など日米安保協力の方向をしめすもの ③防衛力整備計画については3兆5億の見積りの説明

それぞれ A4 用紙 30 ページをこえる長大なもので、これを国会にもはからず、国民にも知らせず、閣議決定で強行しようとする反憲法的なものである。

軍隊は国民の生命・財産を守るものではない。憲法9条は世界の先進的道しるべであっても例外ではない。コスタリカのように軍備を全廃し、経済と文化を発展させている国もある。「戦争中毒」アメリカに学ぶのではなく、憲法9条を世界憲章にするため、「小さな人」である私たちは手をつながなければならない。

マッチ擦るつかのまの海に霧ふかし 身捨つるほどの祖国はありや

1957年、中国などへの侵略戦争に命をささげてきた多くの国民を見て、寺山修司はこう詠んだ。



II 戦後民主主義を「誠実に希求」した大江健三郎

憲法9条 抱いて大江逝く (朝日柳壇)

大江健三郎追悼のニュースは、国内はもちろん多くの国で大きく報道された。

国際的評価

ノーベル賞受賞後の言葉は、川端康成が「美しい日本と私」であったのに対し、「あいまいな日本と私」で、風評・批判を恐れ科学的に筋を通して発言せず、あいまいな態度をとる日本人、平和憲法があいまいに扱われていることを鋭く指摘し、平和と民主主義を闘い取ろうとしている生き方が高く評価された。フランスのルモンドは「弱き人や犠牲になった人、差別されている人、忘れられている人に向けられた深い共感を持つ人」と2000語を超える追悼記事を書いた。ドイツ、中国、韓国等のマスコミも「平和憲法を擁護してきた」と高く評価した。



作家、文化人は

池澤夏樹

東日本大震災の時の文章が私の胸を打ち、私選「日本文学全集」を作るとき、大江に応援してもらった作家、池澤夏樹は「小説は密度が濃く、奔放そして詩」であると明言し、小説のタイトルがそれを示している」として、本の名前を羅列している。大江の文章は詩である。

燃えあがる緑の木 洪水はわが魂に及び 芽むしり仔(こ)撃ち 狩猟で暮らしたわれらの
先祖 人生の親戚 われらの狂気を生き延びる道を教えよ 「雨の木」を聴く女たち み
ずからわが涙をぬぐいたまう日 懐かしい年への手紙

平野啓一郎

私が現在読む「純文学」のこの作家は、大きな影響を受け、言葉が見つからない。小説を書くのが嫌になるぐらい圧倒的。小説とはこういう人が書くんだと思い知らされたと言っている。事実、同年輩の多くの作家志望者があきらめた。

落合恵子

「さよなら原発」のデモでたびたび一緒になったが、スピーチをするとき5分であっても原稿を用意した。なお9条の会事務局の小森陽一は「大江は講演に飛び回ったが、絶対に同じ話はしなかった」と語っている。

映画監督山田洋次

物事を考える上で、正しい指針を与えてくれる人がいなくなってしまった不安と悲しみに包まれている。大江さんと加藤周一さんは、心ある日本人にとって羅針盤を失ったような気持ではないだろうか。

朝日新聞「大江文学へのいぎない」(1月22日)

力作長編からでは挫折しそうなど思う人に、次の3冊を紹介していて読書欲を誘う。

新しい人よ目覚めよ キルプの軍団 日常生活の冒険

日本国憲法の精神を生き抜いた文学者

小泉内閣がテロ対策特別措置法を成立させ、自衛隊をイラクに派遣し、「戦争する国」に転換させようとしたとき、労働組合が分裂し、市民運動も困難な状態の時、加藤周一は組合や政党の枠にこだわらない「9条の会」を構想し、小森陽一が交渉役として大江に会いに行くと、待っていましたとばかりに呼びかけ人になった。その後、様々な機会に大江と接した小森は、「日本国憲法の精神を生き抜いた文学者」という追悼文を書いた。(世界 5月号)

朝日新聞は社説「周縁から世界を見つめ」を掲載し、権力とは距離を置く姿勢が貫かれ、憲法への深い関心とも共鳴し、広島や沖縄、障がいのある子との生活などを通じた社会への敏感な視線につながった。ときに脅迫などの暴力にさらされながらも言葉を紡ぎ続けた」と讃えた。

毎日新聞も社説と評伝で「人間性の回復を求めた。人間らしさとは何かを文学と行動を通じて問い続けた。川端康成は日本の伝統的美を語ったが、大江は魂の救済をテーマに現代人の痛みに向き合い、日本の文学を世界文学の高みに引き上げた。」

赤旗は科学的で温かい社説とともに「潮流」欄で「言葉の人でした。戦後民主主義者であることを誇りにした大江さん。その小説は、現代の窮境を生きる人間の救済がテーマでした。現代日本の最大のテーマとして憲法とヒロシマと沖縄について語り続けました。その言葉はこれからも私たちがともに生きていくでしょう」と述べた。また「文芸時評」で新潮掲載論文を紹介し、作家としての特質を語り、「民主文学」掲載論文から、大江の作品は「人生のありかたに答えだす物語」であるとした。

現代日本文学の方向性、女性が担う

「座談会昭和の文学歴史」で「近い将来、日本で新しい小説的思想、思想的小説にはっきりした世界を達成するのは、若い女性だと思います」と述べ、その理由として、男性的原理の上に立つ天皇制支配、家族制度の衰退をあげている。

「ことばの人」

大江は文化勲章を辞退し、「国民」という言葉は、国に従えという内実があるので使わず、主権者として国をつくる「国の民」という言葉を使った。

一般庶民のまなざし

ここでは朝日新聞の俳壇・歌壇をのぞいてみる(4月16日)

大江さんのまなざしにいた光さんの「静かな生活」CDに聴く

胸中の激しい感情表現す 大江は言葉で光は音で
大江氏の訃報が載った新聞紙 昔の私を包んで畳む
ヒロシマと沖縄という良心が 本棚にあり 大江さん逝く
芸術は政府のものにあらざると 文化勲章辞せし人逝く
卒論のテーマの大江健三郎 遺きて徹夜の青春はるか
優しげな丸メガネの奥に敢然と
春おぼろ 理想なき世に大江死す (23日)



まったく貧弱な読者でしかなかった私とのかかわり

大江と同じ 1935 年生まれで、戦後の民主主義教育を受けた私ではあるが、本棚には「ヒロシマノート」「沖縄ノート」など若干のものしかない。それでも励まし続けられてきたような気がする。高知の教職員組合が、60 年安保と勤務評定反対闘争に取り組むなかで、私は新採用で中村高校に赴任した。その闘いの中で素晴らしい先輩たちが、読書界を企画してくれ、テキストとして「万延元年のフットボール」が選ばれた。故郷の 100 年前の一揆と安保闘争を重ね、アメリカ中心の思考でなく、地域に根差し世界につながる思考を提起し、平和憲法をたぐりよせてくれた。続いて中国史をテキストにして学んだ読書会の経験は、転勤後も生きていて、大正分校で「愛と規律の家庭教育」(レーニン夫人)の読書会に続いた。

私の9条の会との関連で

加藤・大江・小田実らが「9条の会」を結成した時、若い新聞記者が「いまさら憲法と言っても意味がない」と言ったのに対し、大江は「世界」に「窮状にて」という論文を掲載して「国の民」に訴えた。これを読んだ私は、居住地である土佐市に 9 条の会を作ろうとして、事務局長をしていた市民団体「ソーレ土佐」の役員会に提起し、200 人を越す呼びかけ人で「土佐市 9 条の会」を結成した。全国でも最も早い結成であった。大江健三郎の訴えが私たちの心を揺さぶったのである。その他の関連でいえば、東京で開催された井上ひさしの追悼集会に参加し、「井上は私がスピーチをするときは、いつも一番前の椅子に座って、にこにこしながら聞いてくれた」という大江の話を聞いたこと。呼びかけ人の一人であった「高知 9 条の会」が主催の集会に大江を招くことにして、快諾していただきポスターも張り出していたが、家族の病気で中断されたことなどである。

「希求」という言葉

日本国憲法は第2章9条で「…国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇、武力の行使は国際紛争を解決する手段としては、これを永久に放棄する。…」と規定した。「ことばの人」大江はこの「希求」には日本の侵略戦争で犠牲になった日本とアジアの数千万の人々の願いが込められている」と考え、非常に重視した。いまウクライナ戦争を利用して保守政権は、日本を戦争をする国に転換させようとし、世論もマスコミの報道と中国の発展を横目に見た偏狭なナショナリズムにより戦争マインドに傾きつつある。法政大学の前総長の田中さんは「日本は戦時体制に入った」と語っている。私たちが「ヒロシマノート」「沖縄ノート」に励まされ国際平和を誠実に希求しなければならない。社会が戦争に向かっていく危険な兆候は、①言論が不自由になる ②教育が国粹主義にかわる ③監視体制が強化される ④ナショナリズムが強調される ⑤テロの実行が始まる。これは昭和史の泰斗半藤一利が青木理に語った言葉である。しかも昔よりスピードが速いと。(青木理「カルト権力」参照) 公安、軍事、宗教侵蝕の果てに「カルト権力」が生まれたという青木の言葉をあなたはどうか受け止めるか。

大江健三郎が「沖縄ノート」で、軍隊が市民に集団自決を強要したと書いたとき、右翼が暴力で脅迫し、名誉棄損だと裁判まで起こしたとき、あくまでも島の人々の言葉を信じ戦い抜いたことを忘れてはならない。小田実が言う「小さい人」である我々は、平和憲法の本質から生まれる未来への確信・理想を手放してはならない。

III 読書という旅に出る

未知の世界に出会い、心を豊かにしながら知的理性を磨く。ぼんやりと最近読んだ本のリストを作ろうと考えていた時、大江健三郎死去のニュースが飛び込んできた。新聞は社説や伝記で大きく取り扱い、世界的にも、仏・独・中・韓等のメディアが詳しく報道した。仏のルモンドは「弱き人や犠牲になった人、差別されている人、忘れられている人に向けられた深い共感を持つ人」と2千語を超える追悼記事を書いた。ドイツの通信は、平和憲法を擁護してきたと報し、中国・韓国でも高く評価されている。現代日本の最大の課題は憲法と広島と沖縄であると考えた彼は、9条の会の呼びかけ人となった。右傾化する流れに、いくつものダムを作り抵抗してきた。その小説は、戦後民主主義時代を生きてきた者として、窮地を生きる人間の救済をテーマとし、「その小説は密度が濃く奔放で詩である」と、池澤夏樹は語っている。山田洋二は「大江、加藤周一は羅針盤のような人で、指針を与えてくれる人がいなくなり不安と悲しみに包まれている」と語った。ノーベル賞を受賞し、文化勲章に内定したが「国家とむすびついた賞だから」として辞退した。「国民」という言葉は民を国に隷属させるものだからと言って「国の民」を使った「ことばの人」である。あくまで権力と結びつく中央ではなく「周縁から世界を見つめ」(朝日論説)手放さなかった。弱い人の立場、戦後民主主義擁護に立ち行動し続けた。



「万延元年のフットボール」で、故郷の100年前の一機と安保闘争を重ね、アメリカを中心に世界を見ようとする姿勢を揺さぶった。勤評・安保闘争のとき、新採用であった中村高校で、教職員の読書会は最初にこの本を選んだ。私のその他のかかわりでは、NHKの録画で、脳に障害を抱え生まれてきた長男光さんの作曲家への歩みの映像を授業で生徒と一緒に見たこと。私が出席した井上ひさしさんの追悼集会で彼が語った言葉。「私が講演をするとき井上さんは一番前の椅子に座りにこにこととして聞いてくれた。」こうち9条の会が大江さんを講師に招こうとしポスターまで張り出したが、ご家族の病気で中止になったことなどである。

少し前を含めると、最近次の本を読んでいる。

経済関係では 1 社会サービスの経済学 2 人が働くのはお金のためか 3 やさしく強い経済学 4 私たちの地方自治 5 ゼロからの資本論 6 「新しい資本主義」の真実 7 愛の賛歌としての経済学 8 今、「資本論」をともに読む

戦争と平和問題では 1 平和を創る道の探求 2 非戦の安全保障論 3 ウクライナ戦争と世界の分断

歴史学は 1 世界史の構造 2 人類の起源 3 岩波世界歴史講座(4冊) 4 平家物語 5 いちにち古典 6 日本史を暴く 7 歎異抄をひらく 8 超訳芭蕉百句 9 吉野源三郎の生涯

その他 気候変動対策と原発・再エネ 「日本」ってどんな国? 青木理「カルト権力

雑誌は 世界 経済 季刊 Agenda Journalism ノジュール 何冊かの推理小説
今すぐ読みたいものとして 「孤墨」(岩波現代文庫)

私の読書が偏っているものでないことは、「週間ベスト10(八重洲ブックセンター 新書の部 3月18日) 1位 ゼロからの資本論 6位 人類の歴史 7位 80才の壁 10位 日本史を暴く

若干の感想・解説

ゼロからの資本論

わかりやすいゼロからの資本論入門書であり、マルクスの思想を 21 世紀に生かし、資本主義ではない別の社会・コミュニズムの可能性を明らかにしている。「人新世の資本論」の著者斎藤幸平の NHK100 分 DE 名著」の書籍化。

4章までの資本主義の分析に続く、ソ連・中国の「国家資本主義」の説明に続く、第6章には圧倒される。「未来社会」という抽象的な言葉ではなく、マルクスの晩年の思想によるコミュニズムの可能性には勇気づけられる。

第1章 「商品に」に振り回される私たち 第2章 なぜ過労死はなくなるのか

第3章 イノベーションが「クソどうでもいい仕事」生む 第4章 緑の資本主義というおとぎ話

第5章 グッバイ・レーニン 第6章 コミュニズムが不可能だなんて誰が言った？

「吉野源三郎の生涯」

私も授業で語り続けた「君たちはどう生きるか」の著者(この本は今漫画で大人気)、哲学者の彼が戦前は軍国主義と戦い、戦後は朝日新聞から岩波書店に転職し、雑誌「世界」の創刊から最晩年まで編集長を務めた人の伝記。戦前編は「戦争に抗して」で、「学生として哲学を学び、岩波書店が「新書」発刊のころまで。戦後編「平和もとめて」では安保闘争の時、日本の主な知識人が、雑誌「世界」に結集し、平和問題懇談会を作り平和と民主主義のため戦ったことの叙述には心を揺さぶられた。原水禁の分裂などをもたらした政党とはまた違う闘いや戦後民主主義論など学ぶことが多い。「世界」は私が教師になった時から今まで読み続けている、日本の良心といえる雑誌。編集後記は魅力的だった。ぜひ手にしてほしい本である。雑誌「世界は」は特に労働組合の若い幹部を年頭においている。



岩波新書, 石母田正著、高橋昌明編「平家物語」

高知県出身の中世専門、武士と侍の違いのあることを解明した高橋昌明編の岩波文庫

平家物語は、多くの人と同じく、冒頭の「祇園精舎の鐘の音、…盛者必衰の理をあらわす」「おごれるもの久しからず」を教科書で読んだ位のものである。1000 人の人が登場し、時代の移り変わりの中で「運命」を自覚した人たちが主要人物なのに。運命とは武士の進出で揺れ末法思想が広がる時代に生きる覚悟。では、なぜこの本に飛びついたか。それは石母田正が戦中から原稿を書いていた「中世的世界の形成」を学生時代に読み、最も心に残った愛読書であり、「歴史と民族の発見」とともに、私の歴史観を作ってくれた人物であるからである。読んでいてその名文とともに、歴史への分析の素晴らしきは、「これはとてもかなわない。歴史研究者にならなくてよかった」と思わせるものである。石母田は戦後国民文学運動、国民の歴史学運動の旗手として、民主主義思想の先導を務めた。この人がのちに、組織的に無視されているのを見ると、そのころの組織の人間の未来を拓く可能性をもつ柔軟性のなさに、これでいいのかと思っている。

歎異抄をひらく

今年は親鸞生誕 850 年に当たり大きな行事も組まれている。親鸞死後、その思想に対する誤った解釈(息子を含む人々)を嘆いた高弟唯円が書いた名著の解説書。歎異抄は鴨長明「方丈記」、吉田兼好の「徒然草」とならぶ、日本の三大古文と言われ、司馬遼太郎が「無人島に一冊の本を持っていくなら歎異抄」と語ったと宣伝が繰り返されている。親鸞は阿弥陀仏を信じたら(南無阿弥陀仏と唱える)救われるという絶対他力の浄土真宗の開祖である。

人の生涯は阿弥陀仏にゆだねられているから、今は常識になっている葬式や読経、法事は何もしないと語っている。全て仏にお任せよと。この他力への確信は、この本を読んでいて無力な私を叱咤激励してくれた。



孫崎亨「平和を創る道の探求」 外交官 国際情報局長 東アジア研究所長

アメリカ支配の世界にいる日本は、マスコミもウクライナ危機の糾弾・制裁を叫んでいる。戦争は国民の支持で準備されるが、いま日本はその支持の下で戦時体制に入ろうとしている。日本とアジアの多くの人の犠牲の上に、「陸海空軍、その他の戦力はこれを保持しない。国の交戦権は認めない」という憲法 9 条を持ち世界平和の先頭に立とうとしたのに。我々は今ウクライナ危機の糾弾、制裁を超え「平和を創る道の探求」を必要としている。加藤周一が「戦争の準備でなく、平和への準備をしなければならない」。戦後すぐ、大江健三郎の妻の兄である映画監督伊丹十三が、「国民は『だまされていた。』と言うだけではまただまされる」と知的理性を研ぎ澄ます必要性を語った。

世界の片隅で日本国憲法をたぐりよせる (岩波ブックレット)

ブックレットなので気軽に読めるが、憲法9条が、世界の歴史とつながると同時に暮らしとつながる存在であることを教えてくれる素晴らしい本である。

本書は 4 章からなり、1~3 章は、夜間中学、北上市における地域に密着した読書会、陸前高田の保育などの事例紹介、白眉はまとめの第 4 章で、私たちが暮らす「世界のかたすみ」、世界史の大きな流れ、日本国憲法がつながっていることを教えてくれる。



「世界」3月号 世界史の試練 ウクライナ戦争から

日本のマスコミはプーチンが突然悪魔のように侵攻し始めたというが、彼はその3か月前に、一ミリもNATOを拡大しないという、ソ連に対する約束を破って、アメリカは東ヨーロッパに拡大し、ついにウクライナまで手を伸ばした。「ウクライナが NATO に加盟しようとし、南部のロシア系住民を虐待し続けるなら武力行使をする」とプーチンは三か月前に演説している。アメリカ側の基準に立ち、無知・無関心なだけで、国民はそれに踊らされていた。「非戦の安全保障論」という本で伊勢崎賢治(PKO幹部として、世界各地の紛争地域で武装解除を提起し実現した)そう語っている。

日本では世界の大部分が、ウクライナに同情し、支援しているが、人口では西欧より多いグローバルサウスとよばれる中国はもとより西アジア・アフリカ・インド(かつての非同盟諸国など)は必ずしもそうではない。多くのNATO加盟の元首がウクライナを訪問しているが、アジアなどでは日本だけである。20年前に、イラクが核兵器を持っているというウソの口実で、国連憲章に違反して侵略戦争でイラクの市民40万人が死亡し、国民の半数以上の2200万人が家を失い、500万人以上が国外難民になったが欧米諸国は受け入れず、死亡も多く苦難の道を歩まされている。すぐ受け入れられたウクライナ難民とは全く違う扱いである。パレスチナのガザ地域は、国連憲章違反の封鎖が16年も続き、「世界最大の野外監獄」となっている。そこにイスラエルによる爆撃が繰り返されているが、日本では小さなニュースにすぎない。肌の色や宗教、言語を理由に差別することは植民地支配の時代と変わらない。いま中国の覇権主義的態度が非難されているが、武力を行使はしていない。おなし覇権主義国家アメリカは、ベトナム戦争、アフガニスタン・イラク戦争と「戦争中毒」とも呼ばれる武力行使を続けてきた。私たちは、世界には二つの軸があり日本はマスコミも含めてアメリカの息のかかった側に立っていることを自覚すべきである。立たねばならないのは憲法9条の立場である。政府は立憲主義(法の支配)を守れと要求しなければならない。「国の民」「小さい人」である私たちにその自覚が必要である。



身捨つるほどの祖国はありや (寺山修司)

人類の起源

かつては人類の発生、あゆみなどを化石から解明したが、最近では遺伝子学の発達により正しく分析できる。この本は遺伝子学の発達を踏まえ、集団で生存する人類は、常に交流しあってきた。一つの血の継続はない。その中で「民族」は最も新しい概念で、人類史の中では新しく、混じりあい形成されたものである。戦争などの時、国民統合のため「民族」が叫ばれるが、それは純粋な特別なものではない。命を捧げなければならないような国家はあるのか。いまウクライナではナショナリズムの高揚の中で、多くの市民が命を失っている。侵略された場合、命を懸けて戦うべきだというナショナリズム派と沖縄の人が学んだ「命(ぬち)どう宝」という人権・生命擁護派がある。ガンジー、ネルーの「無抵抗の抵抗」でイギリス帝国主義から独立したインド、ソ連等の侵略に武力による抵抗はせず、生命を失わず10年かけて主権を回復した「ビロード革命」という美しい歴史がある。私たちは、前回の東京オリンピックの女子体操で美しい演技をしたチャスラフスカに大きな拍手を贈った。彼女はビロード革命の旗手のひとりであった。日本も米軍の本土上陸という悲惨な事態を避けポツダム宣言を受け入れた。3回目の原爆投下も免れた。幣原喜重郎は、これからの戦争は原爆が使われる。それを避けるためには非武装をと、憲法9条の骨格を提起し、軍人マッカーサーを驚かした。現在は原発がある。攻撃されたら日本民族は壊滅的打撃を受ける。

らんまんの笑顔 「人間・牧野富太郎」伝

長年高知新聞社に勤務した、高知の歴史家・画家である谷是が「語り下ろし」たこの本は、富太郎の驚くべき生き方・生涯を描いて素晴らしい。始まったばかりの朝ドラの知識を与えてくれるだけでなく、人間についても深く考えさせられる。

平田オリザ「名著入門」 日本近代文学から 50 冊を選び解説

1 日本近代文学の黎明 2 「文学の誕生」 3 先駆者たち、それぞれの苦悩 4 大正文学の爛熟 5 戦争と向き合う文学者たち 6 花開く戦後文学 7 文学は続く

最近、これほど面白く読みやすい、しかも歴史と文学について学ばされる本に出会ったことがない。日本近代文学と歴史を学ぶものに最適 懐かしい思いがこみあげてくる。著者は芸術文化観光大学学長・劇団「青年座」主宰。名前の「オリザ」は戦争の困難な時代、食いつぶぐれがないように、父親が宮沢賢治の作品からとってきた、ラテン語で「稲」という意味。

人権の基礎は抵抗権 ……植木枝盛「憲法草案」などから

自由や平等は普遍的人権だと言われる。しかしその基底には抵抗権があることを語る人が少なすぎる。現在の憲法の成立に大きな影響を与えたのは植木枝盛の憲法草案である。それには「悪政は、国民に打倒する権利がある」と明記している。憲法前文の「そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであって、その権威は国民に由来する」ことに自覚のない自由とはいったい何だろう。大江健三郎が「国民」という言葉を拒否したことを紹介したが、9 条の会呼びかけ人の一人、小田実は権力に結びつかないわれわれを「小さい人」と呼び、一人一人は無力のように見えるが、立ち上がれば大きな力を持つと市民の行動を呼びかけた。

追記 購入したがまだ読んでいない本(5月23日現在)

大江健三郎「自選短編集」 「希望の共産党」(あけび書房) 岩波「思想」4月号(高校社会科学問題特集) 「まちがえる脳」(岩波新書)

写真集「核被災に向き合う高校生たち」は県立図書館のものを、私の希望で土佐市民図書館が借り、貸し出してくれた。地域に根差し「足もとから平和と青春を見つめよう」と行動する姿に涙ぐむところもあった。いろんなところで大読書会をと思ったが、それは無理などで、さわやかな文章と写真に目を通し、憲法をたぐり寄せ未来を切り開いてもらいたい。特に教師・教育関係者は。

「世界」6月号は、「維新」躍進の原因などを分析して必読、「無印良品」と宇沢弘文のかかわりから新しい社会について記述した優れもの。「ゼロからの資本論」の斎藤幸平との関連が頭に浮かんだ。

